



世界ノンフィクション全集 12

日本野鳥記

小林清之介

日本野鳥記

小林清之介



きょうせい

世界ノンフィクション全集 12

日本野鳥記

昭和60年6月10日 発行 定価1,500円(送料300円)

著 者 小林清之介◎

発行所 株式会社 ぎょうせい

本 社 東京都中央区銀座7の4の12

営業所 東京都新宿区西五軒町52 〒162

電話 03(268)2141(大代表)

振替口座 東京4-10,000番

編集協力 (株)童 夢

印刷 (株)行政学会印刷所(TO) 製本 大口製本印刷(株)

*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。

0393-921280-1505
(3100157-01-012)

日本野鳥記

ブッポウソウの謎

● 著者 小林清之介（こばやし せいのみすけ）

一九二〇年、東京に生まれる。東京YMCA英語専門学校卒業。日本鳥学会、日本野鳥の会会員、日本児童文学会協会理事。俳人協会幹事。小学館文学賞受賞。主著に『スズメの四季』『鳥の歳時記』『写真歳時記スズメ』『野鳥の四季』『日本の小動物誌―昆虫と野鳥―』『動物歳時記』『小さな博物誌』『動物の四季』『動物五百句』『ファール』などがある。

● 目次

第一章 「ブッポーソー」と鳴く鳥

丸刈^{まるが}りの放送局長 7

鳴き声の正体は？ 22

迦葉山^{かしやざん}へ行ってください 37

弥勒寺^{みろくじ}の宿坊^{しゆくぼう}で 50



第二章 迦葉山かしようざんのラジオ放送

「ただ今、鳴き出しました」 63

「そのまま、お続けください」 78

八木節やぎぶしは終わらない 88

カキトン鳥せいめいと姓名判断 102

ひなを飼かってみよう 119

第三章 鳳来寺山ほうらいじさんからの放送

羽音を立てずに飛ぶ鳥 133

ミス・ブッポウソウ 148

谷川の音を作る 162

鳥籠とりかごを枕元まくらもとに 173

第四章 謎^{なぞ}を解いたラジオと鉄砲^{てつぱう}

撃^うった！ 鳴いた！ 189

日本鳥学会の例会 204

東京の空で「ブッポーソー」 216

剝^{はく}製のゆくえは？ 230

解説 241

参考文献 246

装幀 安彦勝博



第一章 「ブッポーソー」と鳴く鳥

丸刈りまるがの放送局長

昭和九年（一九三四年）五月のことである。東京、渋谷しほやに住む内田清之助せいのおすけ博士のところへ、一人の客がやってきた。内田博士は、農林省の鳥獣調査室長で、その当時の代表的な鳥類学者であった。

今日は土曜日なので、午前中、あるところで講演を済すませると、その足でまっすぐ家に帰ってきた。セルの和服に着替きがえて、座布団ざぶとんの上にあぐらをかいている。客は背広の膝ひざをきちんとそろえ、やや不器用な手つきで名刺を差し出した。

「私、前橋放送局長の猪川と申します。」

内田博士が受け取ったその名刺には、「猪川城」と印刷してあった。

「ほう、珍しいお名前だな。何と読みます？」

「『せい』です。『しょう』とも読みますが、私の場合は『せい』です。」

「見たことのない字だが、どういう意味の字かな？」

内田博士は文章が巧みで、著書の数も多い。少年時代には、将来文学で身を立てようと思つたくらいの人だから、文字には、人一倍関心が深いのである。

「中国で、ある種の珠、つまり寶石のことをそう呼ぶらしいのです。よほど大きな辞書でないと、この字は出ておりませんので……。」

「それでは、印刷所のケースに、活字がないクチだな。」

「その通りで……。私の名刺を印刷する時は、新しく活字を作るんだそうで、印刷屋泣かせだと言われます。」

と猪川さんは笑った。

お茶とお菓子が出た。



自宅の庭でくつろぐ内田清之助博士

「まあ、お楽に……。」

と内田博士は言って、猪川さんに膝をくずさせた。内田博士は気難しいところがあって、気に入らない人に対しては、ひどくそっけない応対をすることがある。ずるい人間や、俗^{ぞく}っぽい人間はきらいなのである。そのかわり、正直で、生^き一本な人間とか、話題の豊富な、センスのいい人間には、打って変わって親切になる。内田博士は、猪川さんを後者のタイプと見たのであった。名前の話で、二人の間に、わずかだが、一種の親しみが生まれていた。

「ところで、」

と、猪川さんが、言葉の調子をあらためた。

「私、鳥には人一倍関心を持っておりまして……。」

「ほう。」

「今度、前橋放送局へ転勤になる前は、長野放送局長をやっております、その時に、鳥の声の放送を手がけました。」

内田博士の顔がほころんだ。

「ああ、あなたですか。戸隠山とかくしやまの鳥の声を放送したのは……。」

テレビのなかった時代だから、放送局の仕事といえば、すべてがラジオ放送である。長野放送局では、昨年、野鳥の声の放送を始めた。テープレコーダーのなかった頃ころだから、すべて生放送である。戸隠山の麓ふもとのあちこちにマイクを取り付け、そこから長い長い線を局の建物まで引いてきて、鳥の声を電波に乗せる。

「あれはいい企画だ。よく思いつきましたね。」

ふだんは表情をくすすことの少ない内田博士が、今日は珍しくにっこりした。すると、鋭い目すろとが急にやさしくなって、別人のように人なつこい顔になる。

この時代、野鳥を籠かごに飼かって、その鳴き声を楽しむことは盛さかんだ。しかし大自然

の中に分け入って、野鳥の声に、耳を傾けるといふようなことは、ほとんど行われていなかった。いや、誰もそんなことに気づいていなかったと言っている。その点、日本は欧米に比べて、だいぶ遅れていたのである。それだけに、猪川さんの思いつきは光っていたわけだ。

猪川さんはうれしそうにお茶をすると、その時のいきさつを、手短かに説明した。一昨年、戸隠神社に参詣した猪川さんは、各種の野鳥の声に聞きほれた。これをぜひ全国に中継放送しようと思った。しかし東京の放送協会の幹部の中に、反対者が多くてだめだった。

「もし鳥が鳴かなかつたら、どうするんだ。格好がつかないじゃないか。」
とその人たちは言った。

「しかし繁殖期の五、六月に、野鳥がさえずるのは当たり前ですから、よほど天候が悪くない限り、放送可能だと私は踏んでいました。それで、何度でもこの企画を持ち出したところ、『あいつ、あんまりうるさいから、一度だけやらせてやろう』ということになったらしいんです。」

と、猪川さんは笑った。

その放送は朝六時から始まる。一日が、さまざまな野鳥のさえずりで始まるのは、悪くないものだ。この放送は好評で、猪川さんが前橋放送局へ転勤になったあと、続けられている。

猪川さんは、頭を丸刈りにしている。その頃、軍人と学生は丸刈りだったが、放送関係者はたいいてい髪を伸ばしていた。そういうところからして、この人は、ちょっと風変わりだった。眼鏡の奥にある大きな目には生気があった。顎の骨が張っている。

（これは、相当な頑固者だな。言い出したら、なかなかあとへ引かないタイプだ。そして、型にはまった、常識的なことのきらいな人間だ。——面白そうな男だな。）

内田博士は、短い間に、そんなことを素早く見てとった。交際範囲の広い人で、したがって人間観察にも鋭いところがあった。学者としても一流だが、人間としても幅と奥行きのある、ひと筋縄ではいかぬ人だった。

ところで、今日の用件は、いったい何だろう。内田博士がそう思って相手の顔を見ると、猪川さんは、ひと膝乗り出すようにして、

「じつは私、今度、地元の群馬県でも、鳥の声の放送をやってみたいと考えまして……。」
と言った。

「結構ですね。どこでやります？」

「沼田ぬまたの奥おくの迦葉山かしようざんという山でやります。それも、ブッポーソウをやろうと、こう思いまして。」

「ふーん。」

内田博士はびっくりした。

「それは、どえらいことを考えましたな。」
と言った。

戸隠山の時は、早朝、ただマイクに入ってくる野鳥の声を流せばよかったのである。だが、今度は山中で、夜だけしか鳴かないブッポーソウの声を放送しようというのだ。前より数倍、いや数十倍難しい仕事だ。内田博士は、その頃、文部省の天然記念物調査委員を兼ねかねていたので、この珍鳥ちんちようの住む土地を、ずいぶん見て歩いた。たいていのところは知っていたが、迦葉山については、まだ聞いたことがなかった。

「その山に、ブッポウソウがいることは、確かなんですね。」

「はい、私は去年、この耳で、鳴き声を聞きました。」

と猪川さんは答えた。

「ふむ。」

と言って、内田さんは、菓子鉢^{かしぼち}から菓子を一つつまんで、口に入れた。具体的な話を聞くつもりである。

「あれは、去年の七月二十日のことです。」

と猪川さんは話し出した。

この時、猪川さんは、東京の中央放送局へ出てきたのである。その帰りに、迦葉山へ立ち寄った。もう、前橋放送局へ移ることが本決まりになっていたので、頭の中は、赴^ゆ任後の仕事のことではいっぱいだった。

前橋でも鳥の声の放送をやってみたい。幸い迦葉山には、今、世間に名高いブッポウソウが住んでいるという話だから、来年度にその放送を手がけたいものだ——と、猪川